楢葉町町制施行70周年記念
第5回特別企画展
5th Special Exhibition

命をつなぐ 楢葉の救荒植物

The Famine Plants of Naraha: Sustaining Lives During Hard Times

楢葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアム
Naraha UMUT Collaborative Museum: A Timeline of the Earth and the Town
大地とまちのタイムライン

2026年 7月25日(土) ― 2027年 7月4日(日)

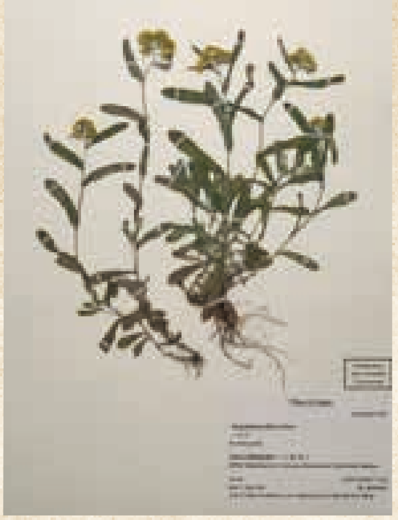
*標本および史料保存のため、2026年12月1日と2027年3月30日より一部展示物が入れ替わります。

開館時間：午前9時から午後4時30分（入館は午後4時まで）
休 館 日：月曜日、国民の祝日、年末年始
観 覧 料：無料
主　　催：楢葉町・東京大学総合研究博物館

右：「ワラビ」（楢葉町前原、2026年採集）
左：「蕨」（岩崎灌園原著・飯田蔵太郎編『本草図譜』巻46菜部、本草図譜刊行会、1918年、東京大学総合研究博物館所蔵）

自然豊かなわが国では、古来より自然の恵みを食材として利用しながら、知恵と工夫を加えることで食文化を大きく発展させてきました。農耕技術の確立により作物の生産性は革新的に高まりましたが、農業生産への依存度の高さは、冷害や水害などの自然の脅威に襲われると、しばしば凶作に見舞われ、食物の供給が大幅に減少することにもなりました。それに対し、江戸幕府は救済金の貸付や貯穀などの飢饉対策を実施しました。飢饉の備えを記した「救荒書」も各地で刊行されています。青木昆陽（1698–1769）によって栽培が奨励された甘藷（さつまいも）は、寒冷地である東北地方での生育は芳しくありませんでした。一方、馬鈴薯などは積極的に栽培され、豊富な山菜類やキノコの利活用など、地域特有の食文化も今に続いています。

本展示では、飢饉のさいに楢葉地域で食された「救荒植物」をテーマとして、楢葉町内で新たに採集した「食べられる植物の標本」を中心に、楢葉町に残された古文書とあわせて「人々の命をつないだ植物」を展示します。また、町民に実施した聞き取り調査をもとに、冷害時に食べた野生の植物、保存の知恵などを紹介し、楢葉地域の食文化の特徴を考えます。



ハハコグサ
（楢葉町下小塙、2026年採集、2026/12/1–2027/3/28展示）

クリ
（楢葉町上小塙、2025年採集、2026/7/25–11/29展示）

イチョウ
（東京大学本郷キャンパス内、2025年採集、2027/3/30–7/4展示）

さつまいも
（岩崎灌園原著·飯田蔵太郎編『本草図譜』巻47菜部、本草図譜刊行会、1918年、東京大学総合研究博物館所蔵）

楢葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアム
大地とまちのタイムライン
Naraha UMUT Collaborative Museum : A Timeline of the Earth and the Town

福島県双葉郡楢葉町大字北田字鐘突堂５番地の４　楢葉町コミュニティセンター１階
アクセス：JR常磐線「竜田」駅下車　徒歩20分
　　　　　常磐自動車道「ならはスマートIC」より 約5分
お問い合せ：楢葉町生涯まなび課　tel. 0240-25-2492